



Title	<図書紹介>南塚豊『デザインにおける形態発想教育の方法』等価変換創造学会1991,37P
Author(s)	日野, 永一
Citation	デザイン理論. 1992, 31, p. 97-97
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53010
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

南塚豊 『デザインにおける形態発想教育の方法』 等価変換創造学会 1991, 37P

著者は、創造性の研究で著名な市川亀久彌氏の提唱する等価変換理論に基づいたデザイン教育の実践を長年実行し、その成果の一端は意匠学会でも発表されている。本書はその著者の、理論と実践の体系化とも言うべき書である。

著者はまず創造性教育とデザインの章で創造性とデザインとがどのように関わるかを取り上げ、創造的活動には図形認識力つまりイメージを明確に認識できる能力が必要であるとし、感覚を基礎とするデザイン教育が創造活動の前提を形成するとする。

次いでデザイン教育特に基礎教育の歴史を一瞥し、イッテン、アルベルス、ナギによるバウハウスの基礎教育は、それぞれアプローチは異なるが、基本には全人格的な感覚教育を前提とした教育方法があるとしている。日本の基礎デザイン教育はこれら海外の影響を受け質的な高まりは見せたものの、創造的基礎デザイン教育の視点が希薄で、専門教育の場においても全人格的な開智の教育、創造的基礎デザイン教育の必要性を主張する。

次の等価変換理論による形態発想教育の構造の章で、著者は市川氏の等価方程式を基に、デザイナーの創造活動の証言を参考としながらデザイン創造の祖型的等価変換を図示する。そして抽象化された造形イメージを意識として把握することが創造的デザインにとって不可欠であることを説く。

形態発想教育の実践的方法の章では、まず形態の意味を問い、前章までの考察から

創造活動にとって必要とされる図形認識の能力を高める様々なトレーニングの方法を考察する。既に過去の教育方法の中に含まれているものも少なくない。こうした素過程の意義について分析し、基礎デザイン教育においてあるべき導入と展開のプロセスを考え、さらに過去の基礎教育の在り方をこの立場から検討を行う。

最後の章では著者が実践した形態発想教育の例が示される。ステップを追っての指導展開は、とかく直観主義や経験主義となりがちなデザイン教育にとって、一つの理論的根拠を与えることになろう。

本書は市川氏を会長とする等価変換創造学会が刊行するモノグラフの一冊として出された小冊子で、非売品であり、一般には入手が困難である。しかし多くの基礎デザイン教育が、模倣主義とは言わないまでも、直観主義・経験主義に頼る現実が多い中に一石を投じるものとなろう。ただ、基礎デザイン教育の方法論について理論の確立を図るには、例えば著者の言うように図形認識能力が必要としても、イメージについての心理学的な側面からの検討が望まれるなど、多方面からの研究が必要となろう。また私自身は創造性育成の方法論をギルフォードの知能構造モデルを中心に考えているが、様々な立場の人が集まって検討を加え、より良い教育の方法論を創造する場が必要ではないかと考える。

日野永一 兵庫教育大学